

八幡門前自治会がある地区の歴史小話（令和4年6月） 回覧

10. 葛飾八幡宮内の富士塚と富士講碑

千本公孫樹せんぼん いちようの東北奥に位置する小山が富士塚ふじづか（以前は弁天池べんてんいけの近くにあり近年移築）である。江戸時代後期に関東で大流行した富士山信仰（富士講）のよりどころとして築造される。関東を中心に200以上が現存している。ミニ富士山として、黒ボクと言われる富士山の溶岩塊を配し、登拝道もある。頂上の富士講碑かんせいは寛政12年（1800）紀で、市川市内に現存する40基の富士講碑の中で一番古い。登り口に慶応3年（1867）の碑がある。



富士山信仰（富士浅間神社）は、享保18年（1733）に富士山で断食して逝った食行身禄じきぎょうみろくの教を元に盛んになる。信者は富士講として集い、「江戸は広くて八百八町、江戸は多くて八百八講、お江戸に

ゃ旗本八万旗、お江戸にゃ講中八万人」という唄も生まれたほどである。幕府が文政6年（1823）に富士講に対して「はめを外さないように」との通達を出すほどである。

講には諸派（ここでは丸不まるにふじ二の講紋こうもん）があるが、基本の教かじきとうえは加持祈祷かじきとうを廃し、「正直・慈悲・情け・不足（貧乏に耐える）」と言う生き方を根幹とするものであった。

講は当該神社から来訪する御師おし（伊勢神宮の場合は「おんし」と称す）の元で信心を深めると同時に、旅行用の積立金制度を持つ団体旅行制度でもある。①所属者は定期的に集まり、お金を出し合い、その合計が代参講員（代表参詣者）の旅費となる。②誰が代表者になるかは「くじ引き」で決める。一度、当たった者は次回からくじを引く権利を失うため、「講」の所属者全員がいつかは当たるように配慮されていた。③選ばれた者には、この地域を担当する御師が旅行添乗員のように同行して、富士参詣へ旅立つ（登拝は女人禁制）。④現地では御師の宿に泊まり、ご馳走でもてなされ、講の所属者の為のお土産購入は欠かせない。

信仰の旅は平安時代の熊野詣くまのもうで、白山信仰はくさんなどから存在するが、庶民が大挙しての旅は宝永2年（1705）に「宝永の御蔭参り」と称される伊勢詣（50日間で362万人…当時の日本の総人口約3,000万人）からである。大山講おおやまあふり（大山阿夫利神社）、三峯講みつみね（三峯神社）など様々な講が誕生した。信仰の名を借りた物見遊山ものみゆざんの側面も大きく、男の場合は帰路に精進落しょうじんおとしの名目めいもくで悪所に出向くのも楽しみの旅だった。

当時来日した外国人も驚きを持って「おそらくアジアのどんな国においても、旅行ということが日本におけるほどこんなに一般化している国はない。」（シーボルト『江戸参府紀行』より）と記録に留めている。

ちなみに近代旅行業が生まれたのはイギリスで、トーマス・クックが禁酒運動の集会に向かう禁酒論者を対象に、1841年に鉄道会社に臨時列車を頼み、安く団体旅行を提供したことから始まる。1851年のロンドン万博で事業を大きく伸ばす。

また、富士講、庶民の旅行ブームが、北斎の「富嶽三十六景」、広重の「東海道五十三次」（保永堂版）の名作誕生の時代背景になっている（共に1830年代前半開版）。